

## 誇りにおもうロータリアンの父



### 田中さえり

#### ロータリアンを父にもつ女子大生より

田中さえりさんは、能谷東クラブ会員田中昭三氏のお嬢さんです。「ロータリアンの家族の投稿が許されるのかどうかわかりませんが、お送り致します。ご迷惑をお許しください」と添え書きにありました。ここに歓迎の意を表し、ご掲載申しあげます。

私の大学で最近、ロータリークラブのことがちよつとした話題になりました。S教授が地方のクラブから卓話の講師に招かれたのが、クラスでロータリー談義のはじまった発端です。みんなのロータリー評は概ね次のようでした。

A「ロータリアンであることが自分のステータスシンボルであるかのように思うのは、人間の貧困さに由来する」 B「金と暇の余ったお年寄りが老後を過ごすための集まり」 C「いい年の連中がばかばかしさをかみ殺しながら、無理に真面目ぶった顔をして奉仕奉仕といひながら施しをする集団」 E「不純性老獮奉仕団体」：など手厳しい評ばかりです。座長格のZが「まあまあ、それくらいで」と止めに入る仕末で、続いて「いったいロータリーとは何だ」との問いには、誰も答える者がおりません。ロータリ

アンを父にもつ私としては、父の名誉のために一言、発すべきところでしたが、その場の雰囲気気が私の口を封じました。

ロータリークラブを特権集団としかみていない人達に「私の父はロータリアン」といえば、白い目で見られるような気がしたのです。しかしそんな視線のなかで、残された学生生活を送る不確かさに耐えられません。それに「ブリッ子」は私の柄でもありません。答えをもってないのが私の救いでした。誰もが街で見かける交通安全の塔や、クラブ寄贈のブロンズ像などで、ロータリーを知る程度のことですから、無理からぬことなのです。私も今までは、彼らと同じような認識しかありませんでした。

私がロータリーの理解を深めることができたのは、父の書齋にあった一冊の入門書からでした。そのなかで「もし善意というものがないならば、ロータリーはただの社交クラブである」という言葉に出会ったのです。奉仕が、善意から生まれなければならぬとすればその行為は、施し、売名、名譽欲、対抗意識などの言葉とは、まったく無縁のものであるはずです。奉仕のかたちが善意から生れていけば、他人の立場にたつて物を考え、他人の痛みも分ち合え、他人の心を思いやることもできます。ロータリーの奉仕は、かたちよりも、こころにあるのだと思いました。多くの困難を乗り越えて、小さ

くは一人一人の身の周りや職場から地域社会へ、やがては一つの国、そして世界中の国へと、奉仕を通じて友愛と平和の輪を広げ続けてゆくことは、何と素晴らしいことでしょうか。それがロータリーの真の姿であると思います。現在のように、ロータリアンを父にもつ自覚と誇りがあつたら、あの時みんなの前で堂々と発言して、誤った認識や偏見を正すように努めるべきだった、と深く反省し、これからの戒めとしています。